

台灣高中生的日語使用情境調查 -為編寫符合 12 年國教新課綱的教材-

黃聖文

東吳大學日本語文學系／博士生

摘 要

2019 年起在台灣將實施新課綱。其課綱中包含第二外語課綱。該第二外語課綱係參照歐洲的歐洲語言學習、教學、評量共同參考架構 (CEFR) 的 A1~A2 的能力描寫來決定各級學習目標及主題，並參照 Can-do statement(以下簡稱為 Can-do)所設計出的。新課綱實施在即，但是以該課綱為基礎所設計的教材極為稀少。

為此，本稿首先針對學習者的「日語接觸情境」及「將來想在什麼樣的情境下使用日語」做了日語使用情境調查。此外也透過交流報告的分析及高中教師的訪談來調查日本高中來訪時，高中生在於什麼樣的情境下使用日文。

其結果中了解到學習者的「日語接觸情境」、「將來想在什麼樣的情境下使用日語」及「國際交流下所出現的日語使用情境」。但於兩項調查中得知的日語使用情境與新課綱的學習表現及主題比較後，有些不存在於 A1 等級當中。由於調查所得知的日語使用情境皆屬學習者所能接觸到的，若能將這些日語使用情境在 A1 等級中導入相信未來能夠在實際溝通時有助於學習者。

今後，望能夠擴大調查並收集學習者所需的日語使用情境來開發出符合新課綱的第二外語課綱之教材。

關鍵詞：台灣的高生日語學習者，日語使用情境，新課綱，Can-do，國際交流

台湾の高校における日本語使用場面に関する調査 — 12年義務教育の新学習指導要領のに準拠する教材 作成に向けて —

黄聖文

東呉大学日本語文学系／博士生

要 旨

2019 年から新学習指導要領が実施される予定となっている。この学習指導要領は国家教育研究院によってヨーロッパの CEFR の A1～A2 の能力描写に基づき、各レベルの学習目標及びトピックが決められ、Can-do statement（以下 Can-do と略す）を参照しデザインされたものである。しかし、それを基に作成された教材はまだ少ない。

そのために、本稿では新学習指導要領に基づく教材開発を目指して、日本語使用場面の設定を考えることにした。まず、学習者が出会うであろう日本語接触場面および将来どのような場面で日本語を使用したいかについての場面調査を行った。また、高校教師に日本の高校生が訪問する際、台湾の高校生がどのような場面で日本語を使用するかについて、交流報告書調査とインタビュー調査を行った。

その結果、「日常生活でよく出会う日本語場面」、「将来、日本語で何をしたいですか」、高校における国際交流の接触場面を明らかにした。二つの調査には新学習指導要領のトピックおよび学習表現にないものや A1 レベルに属しないものも存在するが、コースデザインする際に、取り入れるの方が実際のコミュニケーションに役立つのではないかと思われた。

今後さらに、学習者の日本語使用場面を中心とする場面を集め、教材を開発したい。

キーワード：台湾の高校生日本語学習者、日本語使用場面、新学習指導要領、Can-do、国際交流

A Survey on Japanese Use by Taiwanese Senior High School Students

- To prepare a textbook that meets the new 12-year National Curriculum –

SHENG-WEN HUANG

Ph.D. Student / Soochow University

Abstract

Although this second foreign language syllabus is about to begin, there are few teaching materials designed based on such a syllabus.

This study first investigated the situations for “Japanese contact” and “Japanese use” of learners. Then, the researcher studied the situations for using the Japanese of senior high school students by analyzing exchange reports and interviewing senior high school teachers.

Based on the results, an insight was gained into the learners’ “Japanese access situation”. Since Japanese use obtained from the surveys were accessible to the learners, if Japanese can be imported into the A1 level, it is expected to benefit learners in actual communication in the future.

In the future, it is hoped that Japanese use needed by learners be more extensively investigated and collected in order to develop teaching materials for the second language curriculum in line with the new curriculum.

Key words: Senior high school Japanese learners in Taiwan, Japanese use, new curriculum, Can-Do, international exchange

台湾の高校における日本語使用場面に関する調査 — 12年義務教育の新学習指導要領のに準拠する教材 作成に向けて—

黄聖文

東呉大学日本語文学系／博士生

1. はじめに

台湾では1996年に教育部によって「推動高級中學第二外語教育五年計畫」¹が実施されてから、日本語教育を行っている高校及び高校生の日本語学習者の増加傾向が見られる。現在は表1に示す通り、2015年から第4期「推動高級中學第二外語教育第四期五年計畫」が施行されている。

表1 「推動高級中學第二外語教育五年計畫」の流れ

1996年	「推動高級中學第二外語教育五年計畫」 (1999年7月～2004年12月)
2005年	「推動高級中學第二外語教育第二期五年計畫」 (2005年1月～2009年12月)
2010年	「推動高級中學第二外語教育第三期五年計畫」 (2010年1月～2014年12月)
2015年	「推動高級中學第二外語教育第四期五年計畫」 (2015年1月～2019年12月)

表2から2015年～2016年度に選択科目としての第二外国語を学ぶ高校生の大半以上が日本語を履修していたことがわかった。少子化が進むなか、日本語履修者数が依然として減少されていないことは日本語の人気の高いことが言えよう。

¹本稿にある「標楷體」は中国語の名称をそのまま示すものである。

表 2 高校における第二外国語履修者数、日本語履修者数²

期間	2015 年 9 月～2016 年 1 月	2016 年 2 月～2016 年 6 月
第二外国語履修者	70865 人	69175 人
日本語履修者	43203 人	42621 人
比率	60.9%	61.6%

(「高中第二外語學科中心」の資料より筆者作成)

そして、2018 年 4 月に「108 課綱」の「第二外国語文」(いわゆる 12 年一貫の義務教育の新学習指導要領)³が公布され、日本語を含む第二外国語のカリキュラムが含まれている。正式に学習指導要領に加えることによって、今後義務教育段階での日本語が選択科目として履修されることになる⁴。

そのカリキュラムは、ヨーロッパの「CEFR」を参照しながらデザインされたものであり、「CEFR」の A1～A2 の能力描写に基づき、12 年間義務教育における第二外国語の各レベル(Level-1～Level-4)の学習目標およびトピックが決められ、さらに、Can-do を参照し、それらを明確に示したことがポイントである⁵。

しかし、1996 年から高校の日本語教育が実施されて以来、教育部検定の合格教材がまだないのが現状である。台湾の高中第二外語學科中心(以下高校第二外国語教育センター)で教材として表 3 のものが薦められている。推薦された教材は、殆ど構造シラバスに基づ

²高中第二外語學科中心「102~105 學年高級中等學校開設第二外語課程校數、班數、人數、語種統計表」http://www.2ndflcenter.tw/class_detail.asp?classid=61 (2018 年 1 月 23 日閲覧) 筆者が教育部国教署の補助金を得ている学校と得ていない学校とのデータを合計して作成したものである。

³正式の名称は『十二年國民基本教育課程綱要 國民中學暨普通型高級中等學校語文領域-第二外國語文』(以下「新学習指導要領」と略す)である。

⁴「新学習指導要領」P.2 によると、履修は小中学校段階で「彈性學習課程」で、高校段階では「加深加廣選修」の課程で学ぶことになる。

⁵「新学習指導要領」の P.5-14 の「學習表現」と「學習內容」で 4 レベルに分け、それぞれ CEFR の A1-1, A1-2, A2-1, A2-2 に相当する基準が述べられ、各レベルに Can-do descriptors の能力が記述されている。また「實施要點」(P.15-23)の内容からもその特徴がわかる。

いて作成されたものであり、Can-do の理念に基づいて作られた教材は掲載されていない。したがって、新学習指導要領の実施に向けての新しい教材開発、または教授内容の考案は緊急の課題である。

表 3 高校第二外国語教育センターが推薦している日本語教材教

推薦教材		
大家的日本語	加油日本語	聽聽說學日語
元氣日本語	初級日本語	新初級日本語
e 世代日本語	來學日本語	日本語讀本初級篇
日本語 GO GO GO	隨時隨地學日語 1、2、3	

材⁶

(高校第二外国語教育センターより筆者作成)

なお、近年、国際交流が促進され、姉妹校交流が盛んに行われている。特に日本から訪問する青少年が年々増えている。こういった交際交流における台日の接触場面に具体的にどんな場面があるのかといったことを新しい教材、教授内容に反映する必要があると思われる。

そこで、本稿では、新学習指導要領の実施に向け、教材作成、または教授内容を考案するため、実際の使用場面を把握しなければならないと考えた。まず、高校生の学習者を対象に台湾での生活における日本語の実際使用場面が何かを調査した。また、高校の日本語教師を対象に、姉妹校が訪問する際、国際交流でどんな場面で日本語が使用されるかについて、調査、分析を行う。それらの結果を踏まえ、新学習指導要領の実施に向け、教材作成と現場の日本語指導に提案したいと考えている。

⁶ 高中第二外語學科中心 (2010) 「高中日語教材及教學進度建議清單」
www.2ndflcenter.tw/sun79/dimage/file/Japanese12.pdf (2018 年 1 月 23 日閲覧)
 高中第二外語學科中心 (2014) 『高中第二外語教材及教學進度建議清單更新討論紀錄-日語組』 <http://www.2ndflcenter.tw/sun79/dimage/file/Japanese140721.pdf>
 (2018 年 1 月 23 日閲覧) に基づいて筆者が作った表である。

2. 新指導要領における第二外国語カリキュラムの特徴と国際交流の実際

2019 年実施の「新学習指導要領」は現行の第二外国語カリキュラム⁷と比べると、最も大きな特徴は Can-do を参照し、各レベルの学習目標およびトピックを明らかにしたところにある。Can-do とは、日本語の熟達度を「～できる」という形式で示した文と定義されており、ヨーロッパの CEFR や日本の JF 日本語教育スタンダードで使用されている。

各レベルで行う事のできる言語活動の指標は、「何ができるか」という Can-do による記述方式が具体化され、学習後の日本語の成果や熟達度を「～できる (Can-do)」という形式で明示することにより、教育目標への到達を可視化していると述べている (周 2015)。つまり、Can-do では、言語習得を通し、「何ができるか」という考え方が最も重要であり、これから高校の日本語教育で授業をデザインする際に、学習者が日常生活で「どのような場面で、何のために言語を使用して、そしてその場で何ができるか」を考慮する必要がある。こういった教育を実施するに当たって、それらを反映する新しい教材の開発が必要になる。

「新学習指導要領」には 5 つの理念と 4 つの目標が設定されている。

表 4 「新学習指導要領」の理念及び目標⁸

理 念	第二外国語は、国境を超え、異文化交流の重要な媒介である
	行動を通して第二外国語を学習し、言語文化の差異と彼我の差を養う・肯定・受け入れることである。
	学生を主体とし、適応教育の原則と学習の情意要因を重視することである。
	自律学習及び生涯学習を通じ、学生の第二外国語の能力及び習慣を発展することである。

⁷中国語では「99 暫綱」と称され、2010 年に公布されたカリキュラムである。

⁸國家教育研究院 (2018)『十二年國民基本教育課程綱要國民中學暨普通型高級中等學校語文領域-第二外語文』

https://www.naer.edu.tw/ezfiles/0/1000/attach/23/pta_18521_6265663_59836.pdf
(2018 年 6 月 4 日閲覧) を参照し、筆者が訳したものである。

目 標	言語学習を通じ、異文化を模索し、国際視野を養うことである。
	第二外国語学習の興味と態度を養うことである。
	第二外国語で日常生活におけるコミュニケーション能力を養うことである。
	国際情勢及び目標言語圏の風俗・文化・社会への理解を促進し、世界観を兼ね備え、自国文化を考え直す力を養うことである。
	海外行動力の基礎を構築し、多元的な交流の機会を提供し、国内の外国文化の資源を活用し、異文化リテラシーを高めることである。

(「新学習指導要領」 P.1 により筆者訳)

表 4 から「新学習指導要領」は異文化交流、異文化理解を重要視しており、外国語学習を通じて、学習者のそれらの能力および自律学習、生涯学習が理念であることがわかる。こういった人材を育成するのであれば、語彙と文型のみを重視する「文型シラバス」の教育内容では目標が達成できないことは自明であろう。

なお、新学習指導要領では、Can-do の理念に基づき、学習レベルを Level-1～Level-4 に分けられ、各レベルではどのような学習表現（聞く、話す、読む、書く、総合応用能力、学習ストラテジー、文化と習慣、思考力及び創造力）を習得する必要があるか、そして、各レベルの能力指標も詳しく記述されている⁹。

上述の理念と目標に基づき、「新学習指導要領」のトピックは以下の表 5 のように示されている。

表 5 「新学習指導要領」のトピック¹⁰

1.あいさつ用語	8.健康	15.人間関係
2.自分と家族	9.趣味とレジャー	16.コミュニケーションリテラシー
3.学校生活	10.交通と旅行	17.自然と環境
4.日常生活	11.祝日	18.地域コミュニティとグローバル
5.家庭生活	12.社会的慣習	
6.食べ物	13.テクノロジー	
7.買い物	14.言語と文化	

(「新学習指導要領」 P.12-14 により筆者作成)

⁹詳しい「学習表現」について「新学習指導要領」を参照されたい

<https://www.naer.edu.tw/files/15-1000-14379,c1594-1.php?Lang=zh-tw> (2018/4/16 公表)

¹⁰同注 8。

これらのトピックは Level-1～Level-4 に分けられ、レベルによってさらに下位トピックが設けられ、学習表現と合わせて言語行動が示されている。次に入門の A1 レベルの Level-1～Level-2 のトピックを下表に示す。

表 6 A1 (Level-1 と Level-2) レベルにおけるトピック¹¹

カテゴリー	Level-1	Level-2	カテゴリー	Level-1	Level-2
挨拶用語	挨拶 お礼 別れ 教室用語		家庭生活		家 部屋 家具 方位 町 清潔 ゴミ分類
自分と家族	自己紹介 家族の呼び方 家族の構成		食べ物		レストラン 注文 飲食の好き嫌い
学校生活	時間割表 曜日 時間 部活 数字 学校活動 教室	授業 学校の生活 運動	買い物		ネットショップ ピング 数字 貨幣 商品 商店
日常生活	看板、標示 生活用品 生活 数字	生活習慣 休日 流行 おしゃれ ペット 誕生日 星座	行事	主な行事 社会マナー	

(「新学習指導要領」 P.11-14 により筆者作成)

表 6 のように、「新学習指導要領」のトピックは学習者の周りにある実際出会うトピックを中心とし、教材を作成しなければならない。しかし、順序として何を先に、言語の要素とともに入れるべきか、分量的にどう配分すべきかについては、学生の実生活で触れる日本語の場面の頻度、重要度などを考慮すべきではないかと考えられる。

一方、近年、台湾の教育部も義務教育段階における国際教育に力

¹¹同注 8。

を入れており、2011年に『中小學國際教育白皮書』¹²が発表された。具体的に教育旅行と姉妹校相互訪問ともその国際交流の一部である。

台湾の近隣国家の中で、最も頻繁に交流している国は日本である。台湾国際教育連盟によると、台湾の高校が訪日教育旅行数は2004年の39校(1375人)から2016年の260校(9873人)までに増加し、およそ7倍に成長した。一方、日本の高校が訪台湾教育旅行数は2004年の37校(1423人)から2016年の322(36192人)までになり、およそ25倍に増加していることがわかった。

また、公益財団法人日本修学旅行協会にある2011年度¹³と2016年度¹⁴との統計データを比べてみると、日本の修学旅行の行き先として、台湾がの全体の6.5%から16.1%とおおよそ2倍に増加し、第一位を占めている。このような状況から日本の中等教育段階の生徒の訪問を受け入れるにあたり、場面による日本語授業の設計が重要になってきた。

表7 台湾と日本との教育旅行の統計データ¹⁵

台湾→日本			
2004年		2016年	
学校数	人数	学校数	人数
39	1375	260	9873
日本→台湾			
2004年		2016年	
学校数	人数	学校数	人数
37	1423	322	36192

(台湾国際教育連盟のHPにより筆者作成)

¹²『中小學國際教育白皮書』

<http://ietw.moe.gov.tw/GoWeb/include/index.php?Page=A-2> (2018年1月23日閲覧)

¹³公益財団法人日本修学旅行協会 海外教育旅行調査 「2011(平成23)年度実施海外教育旅行の実態とまとめ(抜粋)」

<http://jstb.or.jp/files/libs/17/201301311956448504.pdf> (2018年1月20日閲覧)

¹⁴公益財団法人日本修学旅行協会 海外教育旅行調査 「2016(平成28)年度実施海外教育旅行の実態とまとめ(抜粋)」

<http://jstb.or.jp/files/libs/389/201802271314173983.docx>(2018年1月20日閲覧)

¹⁵臺灣國際教育旅行聯盟「民國92年至104年高中職國際教育旅行統計資料」travel-edu.com.tw/statistics/ (2018年1月23日閲覧) により筆者が作成した。

異文化交流、異文化理解を重要視している国際交流と「新学習指導要領」をコースデザインに加えるのに、台日の接触場面の現状を無視してはならないと思われる。

近年、台湾における国際交流についての研究が盛んになっている。これまでの研究の中で国際化の指標とされる国際交流に対して台湾で現在行われている国際交流は「長期的・一体性がある計画がないこと（黄 2011）」、「教師と学生の外国語能力の欠乏（李・陳 2011）」などの問題点が指摘されている。

さらに、国際交流における友好校や姉妹校訪問に対して楊(2011)は以下のように指摘している。

「大部分都是特色才藝表演交流、交換紀念品以後、吃吃當地名產或用餐後，接著到當地名勝參訪後就打道回府，兩校的孩子可能連互相說話或認識的機會都沒有，更不用說藉此活動建立長久的情誼了。（筆者訳：交流に來た日本人学生はパフォーマンスを見たり、台湾人の学生と記念品を交換したりした後、当地の名物料理などを食べたりし、観光スポットを巡っては、帰国するのが殆どであるため、交流活動を通し、絆を築くところか、学生同士がコミュニケーションをとったり知り合ったりするするチャンスすらない。）（p33）」¹⁶

そして、国際交流基金の 2015 年度台湾における日本語教育調査¹⁷では、中等教育機関の日本語教師について「中等教育機関での日本語教育は、その殆どがノンネイティブの非常勤教師である」と指摘されている。つまり、日本と最も頻繁に教育旅行や国際交流が行われている中等教育では、専任の日本語教師を有する学校が殆どなく、

¹⁶日本語は筆者訳。

¹⁷国際交流基金「台湾（2017 年度）日本語教育 国・地域別情報」
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/taiwan.html>
(2018 年 8 月 22 日閲覧)。

姉妹校とのやりとりは英語で行われるのが一般的で、学生同士は英語でコミュニケーションをとる。その結果、英語が堪能な学生しか積極的に交流できず、交流が観光の形に終始してしまい、日本語学習や異文化理解教育などにも結びつきにくくなっている。

また、日本側の報告書¹⁸では、日台交流について「英語が苦手な生

徒が英語ができる生徒に頼りすぎて積極的に英語を使って交流することができなかった。」ということも指摘されている。

以上から見ると、台湾と日本との姉妹校の相互訪問が以前よりも重要視され、頻繁になっているにも関わらず、交流の場面を日本語授業に活用し、短い出会いを如何にその後も続けられるかといったような日本語の授業デザインは考慮されていない。英語ができる学生同士しか交流できないことや、姉妹校が観光スポットになり、そこで、一通り学校を案内したり、パフォーマンスを見せたりするなどの問題が浮き彫りになってきた。これらのことはせっかくの国際交流が形式に留まっていると言わざるを得ない。このような状況を解決しなければ、一回きりの交流が増え、交流も継続しにくくなるであろう。海外へ教育旅行や姉妹校訪問に行く機会を活かし、どうすればより学生の成長に繋がる交流にしていけるかを検討しなおし、慎重に計画すべきであると思われる。

そのために、事前に交流を計画し、接触場面に使われる教材を授業に導入すれば、「新学習指導要領」に準拠の A1 レベルなりのコミュニケーションもでき、学生がある程度の言語が身に付き、より継続的に意義のある交流ができると考えられる。したがって、姉妹校交流という場面を調査し、具体的に行われる言語行動を集めることは日本語の教材を開発するのに役に立つと考えられる。

¹⁸「兵庫県立芦屋国際中等教育学校による 2013 アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト報告書」<https://artmile.jimdo.com/report-参加校実践報告/2013年度実践報告/> (2018 年 5 月 13 日閲覧)

3. 先行研究と問題点

前述した「新学習指導要領」に基づき、台湾の高校で Can-do の概念を導入し、授業をデザインし、実践する研究は周（2015）や内田（2014）などが挙げられる。

内田（2014）は私立高校のクラブ活動でゼロスタートレベルの学生を対象に、Can-do の概念で学習目標を設定し、最後の口頭発表でルーブリック表を使って評価を行った。授業の適切性と有効性について、学習者に対するアンケートとインタビューを実施することで検証した。

そして、周（2015）は、技術型高校で第二外国語の選択科目のクラスで Can-do の概念を導入し、学生のニーズに基づき、目標を設定し、授業をデザインした。目標も領域目標とコミュニケーション目標の2つに大きく分けた。評価は授業中の形成的評価と総括的評価を利用し、授業の有効性を検証した。さらにアンケートおよびインタビューから Can-do の概念でデザインされた授業に学習者が高く評価していることがわかった。

周（2015）と内田（2014）から高校での Can-do の概念を導入する授業デザインは効果があり、高校生に適用できることがわかった。このことは新学習指導要領を導入するにあたり、よりよく授業がデザインできると期待できる。しかし、これらは全般的に適用するつながりのある教材作成について、どう処理すべきかについて論述されていない。

第二章で現在高校で使用されている高校第二外国語教育センターから推薦された市販教材は構造シラバスで作成されたものが多いと述べた。それを実践する際に教材に各課に「～ができる」の記述を加えれば、Can-do に基づいて作成されたものになるのではないかといった考えがある。（『考えて話そう』P.2¹⁹）しかし、教師は学習

¹⁹ 『考えて話そう』（2013 致良出版社）の前書きでは「我們決定製作一本能運

者に学習目標を説明する義務がある。構造シラバスの教材は類義の文型や意味が似ている文型を1つの課にまとめて教えようとするために各文型に適用する場面を入れて作成されるのが殆どであるため、単に「～ができる」の記述を加えるような短絡的なやり方で作成すると、結局、学習目標において文型運用の習得が重要視され、実際場面でのコミュニケーションの達成能力は二の次になる。実際必要な異なる場面でのコミュニケーション能力の発展のつながりも弱くなると思われる。学習者が思考活動を連続的に発展させることができず、結局教材を学び終えたところで実際行動の何ができるようになるのかを学習者に説明することができない。

このように考えると、単に Can-do に基づいて教材作成をすればいいというわけではなく、1冊の教材全体の目標をさらに明確に示し、Can-do に基づいて作成される教材が必要である。

以上を踏まえて、本稿では、学生が実生活で出会う場면을調査する。そこで、高校生の生活の使用場면을アンケートで調べ、また、国際交流が行われる際にどんな接触場面があるのか、新北市高校の交流報告書調査及び台湾北部の高校で姉妹校訪問の担当教師に対するインタビューを行い、学校では台湾の高校生はどのような場面で日本語を使用するのかについて調査し、明らかにしたい。

4. 調査概要

4.1 学習者の使用場面調査

学習者の使用場面調査の調査協力者および調査手順、分析手順を述べる。台湾北部にある A 公立高校の日本語クラスの学習者が調査協力者として協力してくれた。A 高校は 2010 年から「日本語」の選択科目を増やし、さらに今年 2017 年 2 月に「日本文化」に関する選択科目も設けられた。日本語の授業は第二外国語を選択科目として、週に 50 分行われる。

用初級句型的日語會話課本教科書，讓初級學習者能利用有限的句型簡單地表達意見……」と述べ、文型に基づく会話応用の新しい試みが見られる。

それ以外に毎年 A 高校は日本の姉妹校との交流会が一回行われる。日本の姉妹校の高校生を誘い、A 高校の一年生と交流する。A 高校は学生に様々な日本語を勉強する機会と日本との交流機会を提供し、学生に学んだ日本語を実際に使う機会を与えることで、日本語学習に対する好奇心を育てる努力をしている。

調査協力者は、105 学年度台湾 A 高校一年生である。計 5 クラス、約 200 人。一学期の日本語授業を受け、2017 年 1 月 11 日、授業の最後に行われた。

協力者のアンケートは自由記述（中国語）により、問題は 2 つである。問題は以下の通りで訳した。

(1) 日常生活よく出会う日本語場面。

(2) 将来日本語で何をしたいですか。

それから、自由記述の内容を分類し、さらに新学習指導要領の場面を参照し、分類して比較することによって、学習者のニーズと新学習指導要領のトピックを比較し、現場に提案する。

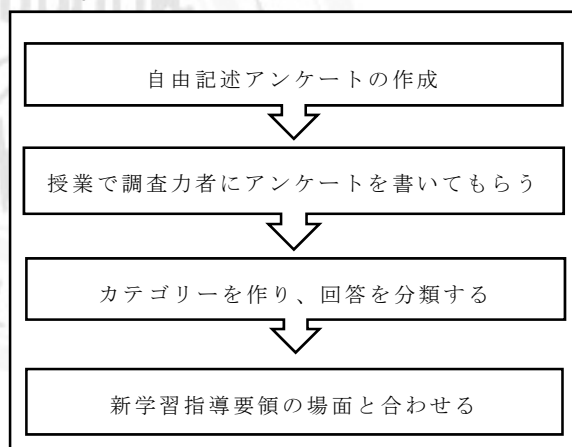


図 1 調査・分析手順)

4.2 国際交流における日本語使用場面の調査

以下国際交流における日本語使用場面の調査対象および調査方法を述べる。

まず 2016 年の高校の交流報告書 2 本（B 校²⁰と C 校²¹）の報告書

²⁰ 「聖心女中【国際交流】SIEP 成果報告書」<https://goo.gl/Hq15ma> (2018 年 5 月

を分析対象とする。インターネットのホームページに掲載され、内容がみられるのは、この2本の報告書のみである。

報告書のほかに台湾北部の高校で姉妹校訪問の担当教師（以下はA教師とB教師と称する）に1時間程度の半構造インタビューを行った。この2校とも外国語教育と国際交流に力を入れている。A教師が所属している学校では1年生の必修科目として日本語を設けており、B教師が所属している学校では1年生の必修科目としてドイツ語と日本語を設けている（半分の生徒は日本語、半分の生徒はドイツ語を勉強する）。さらに、A教師が所属している学校は、2016年に「教育部国民及学前教育署」による主催された第一回国際交流シンポジウムで、北部の姉妹校訪問のモデル校に選ばれた。

A教師は日本語教師で、B教師は日本語教師ではない。本来、日本語教師にインタビューするのが望ましいが、高校での日本語教師の殆どは非常勤講師であるため、日本人教師が必ずしも姉妹校訪問に関わるとは限らない。そこで姉妹校訪問に詳しい担当教師にインタビューすることにした。

また、B教師が所属している学校の姉妹校は2010年から毎年訪問してくるが、その日本の高校とは実際姉妹校協定を結んでいない友好校である（本稿では便宜上姉妹校と称する）。

半構造インタビューの質問は以下の通りである。

表8 半構造インタビューの質問

1.	年に何回国際交流を行いますか。
2.	近年、交流は変化がありますか。
3.	交流は何時間（何日）ですか。
4.	双方の交流人数は何人ですか。
5.	この学校、主に何年生が参加しますか。
6.	交流する前に、必ず日本語を履修しなければならないですか。
7.	日本語を履修してから交流日まで、学習者はどのくらい日本語を勉強しましたか。
8.	交流ではどのような活動がありますか。
9.	これらの活動の中で学生が日本人と話をしなければならない活動はありますか。
10.	交流で学生たちが主にどのような言語を使用しますか。
11.	交流する前に、学生たちと日本人と事前に連絡する機会がありますか。

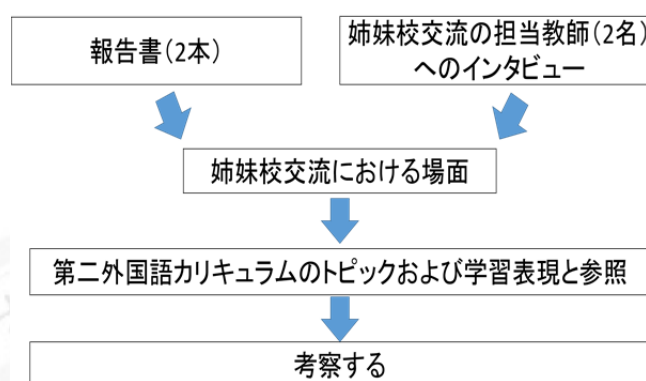
13 日閲覧)

²¹ 「三重高中【学校国際化】SIEP 成果報告書」<https://goo.gl/6GKQiw> (2018 年 5 月 13 日閲覧)

12. 交流後に、学生たちは日本人と連絡し続けますか。
13. 交流前後、学生は日本語学習において変化がありますか。
14. 国際交流について、これからの学校の方針は何ですか。
15. 国際交流について先生はどのような理念を持っていますか。

本論は台湾の高校生日本語学習者の日本語使用場面について探求するもので、8、9、11のみを分析対象とする。

報告書およびインタビューのデータから姉妹校訪問の際に、学校内で行われている台湾の高校生日本語学習者の日本語使用場面を抽出し、新学習指導要領のトピックと学習表現を入れ、姉妹校訪問における場面を考察する。



(図2 調査・分析手順)

5. 結果と分析

5.1 学習者の日本語使用場面の結果及び分析

105年度台湾A高校一年生(計5クラス、約200人)を対象とし、アンケート調査したところ、「日常生活よく出会う日本語場面」を計225の回答、「将来日本語で何をしたいですか」を計148の回答を得た。回答を分析したところ、新学習指導要領の場面に分類できた。それがどの場面はどのレベルに属するかについて、表9と表10に示している。

表9 日常生活よく出会う日本語場面

分類	新学習指導要領の場面	回答数	割合(%)
アニメ、漫画、小説	趣味とレジャー (A2-1～A2-2)	62	28%
ゲーム	趣味とレジャー (A2-1～A2-2)	60	27%
動画	趣味とレジャー (A2-1～A2-2)	33	15%
音楽	趣味とレジャー (A2-1～A2-2)	20	9%
食べ物	食べ物 (A1-2)	20	9%
生活でよく出会う言葉	日常生活 (A1-1～A1-2)	11	5%
説明書	日常生活 (A1-1～A1-2)	9	4%

学校環境	学校生活（A1-1～A1-2）	4	2%
SNS	人間関係（A2-2）	2	1%
旅行	交通と旅行（A2-1～A2-2）	1	0%
買い物	買い物（A1-2）	1	0%
交流	人間関係（A2-2）	1	0%
あまり使っていません		1	0%
合計		225	100%

表 9 から見ると、「趣味とレジャー」に属する 4 つの場面を合わせると 79% を占めており、この場面は高校生が日常生活で最も多く出会う場面であるといえよう。

表 10 将来日本語で何をしたいですか

分類	新学習指導要領の場面	回答数	割合（%）
旅行	交通と旅行（A2-1～A2-2）	56	37.8%
コミュニケーション、交流	人間関係（A2-2）	45	30.4%
作品が理解できない	趣味とレジャー（A2-1～A2-2）	32	21.6%
歌を歌う	趣味とレジャー（A2-1～A2-2）	4	2.7%
わからない		4	2.7%
日本文化を知りたい	社会風習（A2-2）	3	2%
仕事	追加：仕事と職業	2	1.3%
食べ物	食べ物（A1-2）	1	0.6%
言語能力を高めたい		1	0.6%
合計		148	100

表 10 から見ると、「交通と旅行」「人間関係」「趣味とレジャー」をあわせて、90% を占めている。

以上の調査結果から、高校生が日常生活でよく出会う日本語使用場面として、「アニメ、漫画、小説」「ゲーム」「動画」「音楽」「食べ物」が上位 5 位を示しており、「将来日本語で何をしたいか」という質問では、「旅行」「コミュニケーション、交流」「作品が理解できない」が合わせて 90% を占めている。

「アニメ、漫画、小説」「ゲーム」「動画」「音楽」などは台湾の日本語学習者が日本に興味を持つようになる主なきっかけである。そして、それらに出てくる日本語が理解できるようになりたい（作品が理解できるようにたい）につながり、日本語学習を始める学習者が多いといえよう。そして、「将来、日本語で何をしたいか」の調査では、「旅行」、「コミュニケーション、交流」、「作品が理

解できるようになりたい」という順になっている。つまり、「旅行」と「コミュニケーション、交流」は、高校生が学習する日本語にとって大きな目標の一つであると言えよう。これらの場면을教授内容に取り入れることによって、学習者のモチベーションを高めることが期待できるであろう。

5.2 国際交流における日本語使用場面の結果及び分析

本稿では、学校内で行われている姉妹校訪問における台湾の高校生日本語学習者の日本語使用場面を明らかにするため、2本の報告書と日本語教師2名に行った半構造インタビューのデータから日本語使用場面を抽出した。インタビューから姉妹校訪問は、学校内、ホームステイ、学校外（観光スポットの案内など）があることがわかったが、学習目標が広がらないように、今回は学校内での場面に絞ることにする。2本の報告書と2名の教師のインタビューデータから抽出した場面を表11に示す。

表 11 国際交流の場面

報告書	B校	学校案内 歓迎会 基礎的な中国語 授業体験：文化体験（郷土芸術、民族踊り、台湾料理） 授業体験：化学（共同で化学の実験） 送別会
	C校	授業体験：地理 授業体験：美術 授業体験：国際問題
インタビュー	A教師	自己紹介 歓迎会：代表及び学生代表による挨拶 歓迎会：パフォーマンス（台湾：ダンス（最後日本人を誘って、一緒に踊る）、日本：剣道） 歓迎会：記念品贈呈（学生代表による） 授業体験：住む町や国の紹介（Googleのマップやネットの写真を使い台湾の観光スポット、グルメなどについて紹介する） 授業体験：台湾と日本との高校生活の違いの討論 送別会：自由交流（写真を撮ったり、連絡先の交換をしたりする）
	B教師	授業体験：ゲーム（姉妹校と各クラスが考えたゲームをする） 授業体験：文化体験（4つの体験にわけて、台湾人高校生1名が日本人高校生3名を担当し、事前に先生から学んだ文化に関わる手作りのものを姉妹校の学生に教える）

そして、抽出した場面でどのような授業に活かしていくかについて詳しく記述されていない授業体験（基礎的な中国語、国際問題、地理）を除き、新学習指導要領のトピックおよび学習表現を参照にし、下の表に示す。

表 12 抽出した場面とトピックおよび学習表現との参照

抽出した場面	新学習指導要領のトピック	学習表現
自己紹介	Level-1（自分と家族 - 自己紹介）	Level-1（総合応用力：自分の名前を言ったり、相手の名前を聞いたりすることができる）
学校案内	ない	ない
歓迎会：学生代表による挨拶	ない	ない
歓迎会：記念品贈呈	Level-4（行事 - 贈り物）	Level-4（総合応用力：贈り物をあげたり、もつたりする際に、適切な対応ができる）
歓迎会：パフォーマンスの誘い	Level-4（行事 - 誘い）	Level-4（話す：友達を活動に誘うことができる）
授業体験：ゲームのやり方の説明	ない	ない
授業体験：行事の説明	ない	Level-2（文化理解：簡単な外国語で国内の主な行事を紹介することができる）
授業体験：作り方ややり方の説明	ない	ない
授業体験：住む町や国の紹介	Level-3（家庭生活 - 町）	Level-3（話す：メディアで住む町の特色を紹介することができる）
授業体験：高校生生活の説明と理解	Level-1（学校生活 - 時間割） Level-1（学校生活 - 学校活動） Level-2（学校生活 - 学校の日）	Level-2（総合応用力：友達に一週間の生活を説明したり、聞いたりすることができる）
送別会：別れの挨拶	Level-1（挨拶用語 - 感謝） Level-1（挨拶用語 - 別れの言葉）	Level-1（話す：簡単な挨拶用語で先生やクラスメイトに挨拶することができる）
送別会：連絡先の交換	ない	ない

抽出した場面を新学習指導要領のトピックおよび学習表現と参

照した結果、「自己紹介」、「授業体験：高校生生活の説明と理解」、「送別会：別れの挨拶」のトピックはさらにそれぞれ「自分と家族」、「学校生活」、「挨拶用語」が加えられる。

しかし、「学校案内」、「歓迎会（学生代表による挨拶）」、「授業体験（ゲームのやり方、作り方、やり方）」などの説明や案内場面に適用するトピックと学習表現はなかった。そして、「授業体験（行事の説明）」という場面では、学習表現が記述されているが、トピックがないことがわかった。これらの場面は、台湾の高校生の日本語学習者が普段で会えない場面であるが、黄（2017）は台湾の大学生の日本語学習者を対象に、姉妹校訪問において「日本語で発言しなければならない場面」について調査したところ、説明・通知²²と答えた人が最も多いと指摘している。また、今回のインタビューで、A校の教師は学習者が交流会において英語であることについて説明しようとしたが、相手にうまく伝えられず、スマートフォンで Google の翻訳機能で中国語を日本語に訳し、なんとなく伝えたということは何回も目にしたと述べた。

つまり、説明のような場面では、やはり日本語を使用しないと不自然であると学習者が感じており、英語を使うよりも初級の日本語で説明したほうがうまく伝えられる可能性があると言えよう。

このような場面を取り入れることによって、「国際情勢及び目標言語圏の風俗・文化・社会への理解を促進し、世界観を兼ね備え、自国文化を考え直す力を養うことである。」という新学習指導要領の目標を達成することもできると思われる。

さらに、「歓迎会（記念品贈呈）」、「歓迎会（パフォーマンスの誘い）」、「授業体験（住む町や国の紹介）」は、当てはめられるトピックとして、「行事 - 贈り物」「行事 - 誘い」「住む町や国の紹介」があるが、いずれも A2 レベル（Level-3～Level-4）のトピックである。そして、連絡先の交換のようなトピックもなかった。当てはめられ

²² 自己紹介、レストランのメニュー、観光スポット、道の案内、日程・スケジュールの説明、規則の説明、国の言葉、歴史の説明など

るトピックとしては Level-4（人間関係 - 関係の築きおよび維持）がある。これらの場面は A1 レベルの学習者も簡単な日本語で対応できると思われる。

6.おわりに

2019 年から「新学習指導要領」が実施され、今後義務教育段階での日本語履修者数はさらに増えると思われる。台湾の新時代に相応しい高校生の日本語教材が期待される。本稿で台湾北部にある A 公立高校の日本語学習者に対して調査した結果、高校生が日常生活でよく出会う日本語使用場面の上位 5 位は「アニメ、漫画、小説」「ゲーム」「動画」「音楽」「食べ物」であり、将来日本語で何をしたいかという質問では、「旅行」「コミュニケーション、交流」「作品が理解できない」を合わせて 9 割を占めていることがわかった。教授内容を考案する際に、取り入れると学習者の日本語使用場面に近づき、学習動機が高められると思われる。

なお、高校の交流報告書および台湾北部の高校で姉妹校訪問の担当教師にインタビュー調査をした結果、「歓迎会（学生代表による挨拶、記念品贈呈、パフォーマンスの誘い）」、「学校案内」、「授業体験（ゲームのやり方の説明、作り方ややり方の説明、行事の説明、住む地域の紹介、高校生活の説明と理解）」、「送別会（連絡先の交換）」などの場面があることがわかった。

抽出した場面に新学習指導要領のトピックと学習表現を入れてみたところ、「自己紹介」、「授業体験：高校生生活の説明と理解」、「送別会：別れの挨拶」はそれぞれ「自分と家族」、「学校生活」、「挨拶用語」に対応できるトピックがある一方、「学校案内」、「歓迎会：学生代表による挨拶」、「授業体験（ゲームのやり方の説明、作り方ややり方の説明）」に適用できるトピックと学習表現がなかった。そして、「授業体験：行事の説明」という場面では、学習表現が記述されているが、トピックがないことがわかった。さらに、「歓迎会：記念品贈呈」、「歓迎会：パフォーマンスの誘い」、「授業体験：住む町や国の紹介」は、当てはめられるトピックとして、「行事 - 贈り物」

「行事 - 誘い」「住む町や国の紹介」があるが、いずれも A2 レベル (Level - 3～Level - 4) のトピックである。また、「送別会：連絡先の交換」に対応できるトピックもなかったが、類似するトピックとして Level - 4 (人間関係 - 関係の築きおよび維持) がある。これらの場面は A1 レベルの学習者も出会える場面なので、A1 レベルでこれらのトピックを導入し、教授内容に組み込まれると実際のコミュニケーションに役立つのではないかと思われる。

今回は学習者ニーズの部分は一校の日本語学習者のみを調査協力者としたので、結果を全般的に応用するのにはまだ困難があるであろう。今後北部、中部、南部の高校を調査対象としたい。

今後、今回の調査結果を踏まえ、学習ニーズと姉妹校訪問の場面を中心とする A1、A2 レベルの場면을さらに集め、言語表現 (文法、語彙) を入れ、新学習指導要領に準拠する教材を開発したい。なお、今回は「学校内」のみの国際交流場面に絞ったが、ホームステイなどの「学校外」における調査も必要だと考える。そして、その調査結果を授業内容に組み込み、教材化にすることも合わせ今後の課題とする。

< 付記 >

学習者の使用場面調査は 2017 年 8 月 4 日～8 月 5 日淡江大学で開催された「第 11 回 OPI 国際シンポジウム (台湾大会)」においてポスター発表した内容を加筆修正したものである。そして、国際交流における日本語使用場面の調査は台湾科技部の補助 (MOST-107-2922-I-031-005) の下で 2018 年 8 月 3 日～8 月 4 日イタリア・ヴェネツィアカ・フォスカリ大学で開催された「ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会」において口頭発表した内容を加筆修正したものである。

参考文献

中国語

李思範・陳美如（2011）〈姊妹校交流的困境與突破〉《師友月刊》第 529 期、財團法人台灣省中小學校教職員福利文教基金會、p p.13-17

黃三吉（2011）〈國際交流的實質效益〉《師友月刊》第 529 期、財團法人台灣省中小學校教職員福利文教基金會、p p.9-12

楊雅心（2011）〈締結姊妹校的迷思〉《師友月刊》第 529 期、財團法人台灣省中小學校教職員福利文教基金會、p p.32-34

日本語

内田さくら（2014）「A1 における Can-do 概念を導入した日本語授業の実践研究 ―生徒からのフィードバックを分析して―」『台灣日語教育學報』第 23 号、台灣日本語教育学会、p p.324-352

周欣佳（2015）「JF 日本語教育スタンダードの Can-do 概念を導入し

た A1 レベルの実践研究 ―実業関係の総合日本語能力育成を目指して―」『銘傳日本語教育』第 18 期、銘伝大学応用日本語学科、pp. 9-33

黃英哲（2017）「台湾人日本語学習者と訪台日本人研究団の交流状況から考える対日交流能力の育て方」『台灣日語教育學報』第 29 号、台灣日本語教育学会、p p.83-112

サイト資料

中国語

高中第二外語學科中心「102~105 學年高級中等學校開設第二外語課程校數、班數、人數、語種統計表」

(http://www.2ndflcenter.tw/class_detail.asp?classid=61)

【2018 年 1 月 23 日閱覽】

高中第二外語學科中心（2010）「高中日語教材及教學進度建議單」

(www.2ndflcenter.tw/sun79/dimage/file/Japanese12.pdf)

【2018 年 1 月 23 日閱覽】

高中第二外語學科中心（2014）「高中第二外語教材及教學進度建議清單更新討論紀錄-日語組」

(<http://www.2ndflcenter.tw/sun79/dimage/file/Japanese140721.pdf>)

【2018 年 1 月 23 日閱覽】

新北市政府教育局國際教育資訊網「聖心女中【國際交流】SIEP 成果報告書」

(<https://goo.gl/Hq15ma>)

【2018 年 5 月 13 日閱覽】

新北市政府教育局國際教育資訊網「三重高中【學校國際化】SIEP 成果報告書」

(<https://goo.gl/6GKQiw>)

【2018 年 5 月 13 日閱覽】

國家教育研究院（2018）『十二年國民基本教育課程綱要國民中學暨普通型高級中等學校語文領域-第二外語文』

(https://www.naer.edu.tw/ezfiles/0/1000/attach/23/pta_18521_6265663_59836.pdf)

【2018 年 6 月 4 日閱覽】

教育部（2011）『中小學國際交流白皮書』

(<http://ietw.moe.gov.tw/GoWeb/include/index.php?Page=A-2>)

【2018 年 1 月 23 日閱覽】

臺灣國際教育旅行聯盟「民國 92 年至 104 年高中職國際教育旅行統計資料」

(travel-edu.com.tw/statistics/)

【2018 年 1 月 23 日閱覽】

日本語

公益財団法人日本修学旅行協会 海外教育旅行調査

(<http://jstb.or.jp/publics/index/49/>)

【2018 年 5 月 20 日閱覽】

公益財団法人日本修学旅行協会 海外教育旅行調査 「2011(平成 23)

年度実施海外教育旅行の実態とまとめ(抜粋)

(<http://jstb.or.jp/files/libs/17/201301311956448504.pdf>)

【2018 年 1 月 20 日閲覧】

公益財団法人日本修学旅行協会 海外教育旅行調査「2016(平成 28)年度実施海外教育旅行の実態とまとめ(抜粋)」

(<http://jstb.or.jp/files/libs/389/201802271314173983.docx>)

【2018 年 1 月 20 日閲覧】

国際交流基金「台湾(2017 年度)日本語教育 国・地域別情報

(<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/taiwan.html>)

【2018 年 8 月 22 日閲覧】

Japan Art Mile 「2013 アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト報告書」

([https://artmile.jimdo.com/report-参加校実践報告/2013 年度実践報告/](https://artmile.jimdo.com/report-参加校実践報告/2013年度実践報告/))

【2018 年 5 月 13 日閲覧】

教材

『考えて話そう初級日本語會話①』(2013)致良出版社 文藻外語大學日本語文學系

付録 1 新学習指導要領の理念および目標

基本理念

- 一、以第二外國語文作為跨國界、跨文化溝通之重要媒介。
- 二、透過行動學習第二外國語文，培養肯定接納語言文化的差異、人我差異。
- 三、以學生為中心，重視適性的原則與學習的情意因素。
- 四、發展學生自主學習與終身學習第二外國語文的能力與習慣。
- 五、透過語言學習探索不同國家的文化，培養國際觀。

課程目標

- 一、培養學習第二外國語文的興趣與態度。
- 二、培養以第二外國語文進行日常生活溝通的基本能力。
- 三、增進對國際事務及第二外國語文國家民俗、文化、社會的了解，培養兼容並蓄的世界觀，進而反思本國文化。
- 四、建立日後國際行動力之基礎，提供多元交流機會，善用國內的外國文化資源，提升理解不同國家的文化素養。